

コラム

# 「ビリギャル」

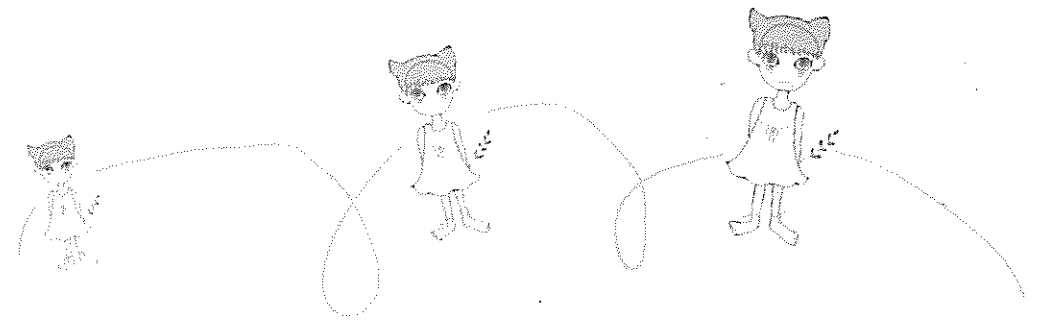
久しぶりに面白い映画があり、自分の歳も忘れ、二晩続けて徹夜で見入ってしまった。映画のタイトルは「ビリギャル」。ストーリーは「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて（偏差値30から塾で勉強して）慶応大学に合格した話」というものであり、実話をもとにした映画となっている。書籍でもベストセラーとなったので、ご存じの方も多いかと思う。

年配の方々「ビリギャル」のような触れ込みのタイトルを目にすると、ありきたりのサクセスストーリーか、はたまた学習塾の宣伝映画かと受け取られるのかも知れないが、これがどうしてこうして、結構面白い映画となっていた。娯楽映画としても十分楽しめる映画であったが、少し違う観点から見ると更に興味深い映画であった。

まず何より、学年ビリが慶応大学に合格という話題が映画になってしまうということ自体が興味深かった。なぜなら、一世代前までは「ビリギャル」のような話は、割と平凡な話であり映画になどなりようがなかったからだ。現在、社会の中核を担っている50歳代以上の世代も、誇張して言えば、若い頃は皆ビリばかり（言い過ぎか？）であった。今

でこそ〇〇会社取締役・〇〇局長・〇〇先生等々の肩書きのある方も、1950年代当時の状況を振り返れば戦争の爪痕からの復興期であり、1960年代から70年代にかけては安保闘争の激化で学校は開店休業状態（学校に行かないで卒業した人もかなりいたはず）であり、1980年代は校内暴力が吹き荒れ勉強どころではない…と次々に勉強どころではない状況が続いて来た。そのため、勉強のできない（やれない）人の方がどちらかという多数派であり、勉強のできる人の方が少数派であった。

筆者自身も例外でなく、高校時代は「ビリギャル」と同じく偏差値30以下（判定不能）であった。教科書など開きもせず、国語など大嫌い、将来コラムなどの文章を書くことになるとは夢のまた夢にも思っていなかった。それが、ほんのちょっとした切っ掛けで、数年後には文章を書くようになってしまうのだから人間という生き物は恐ろしいものだ。筆者も機会があれば、映画「ビリガキ」（仮）でもつくってほしいものだが、生憎、周りを見渡すと「ビリガキ」候補がウヨウヨしていて、とても映画になりそうにないので諦めることとしたい。



杜 海樹

それはさておき、学年ビリの学生が有名大学に入ることなど一昔前までは決して珍しいことではなかったにもかかわらず「ビリギャル」のような題材が映画になり得るとは、現代社会は余程社会移動性がなくなって来たということの証しなのであろうとイメージしながら映画に見入っていた。多くの人が、カエルの子はカエル、金持ちは金持ち、貧乏は貧乏、社長は社長、派遣は派遣、アルバイトはアルバイト…と社会を固定的にとらえ、固定化された枠を飛び越えることは奇跡としか捉えられなくなってきているのかも知れない。映画は、土農工商制や華族制等がないにもかかわらず、社会移動性の少ない閉塞状況の日本の姿に疑問を投げかけているようでもあった。

また、「ビリギャル」は学年ビリからの勉強法として、知らない事は知れば良いだけとしながらも、戦略・戦術・ノウハウが極めて重要であるということ具体的に指摘していた点で興味深かった。例えば、教科書で勉強するより漫画で勉強する、試験科目を絞って勉強する（絞った試験科目以外の勉強はおこなわない）等々。自分自身の不利な条件下でたたかいを挑む場合には、そうしたノウハウ

が重要なものとして描かれていた。映画は、社会移動の奇跡は偶然などで起きることではなく、緻密な計算に裏付けられてこそ起こりうるもの、裏を返せば緻密な計算を立てて臨めば閉塞・固定化した社会においても大胆な社会移動が可能だと訴えているようにも見て取れた。

そう思うと、「革命」がお伽噺と化しつつある現代日本社会においても、まだまだ大規模な社会変動の可能性というものもあるのかと感慨深いものがあった。チャンスは誰にでも公平にあるのかも知れない。

